

薄田泣菫評傳

——新聞記者時代——

一

松村

綠

大正元年（一九一二）八月一日、泣菫薄田淳介は「編輯局見習」といふ辞令を受けて、大阪毎日新聞社（現在の毎日新聞大阪本社）に入社した。つい二日前の七月三十日に明治天皇が崩御になって、大正と改元せられたばかりの慌しい空気の中に、いよいよ泣菫は本格的な新聞人としての活動を開始することになったのである。

泣菫の大阪毎日入社は、旧い友人の一人で、同社の古参である菊池幽芳（明治三十一昭和二三）の誘引によると聞いてゐるが、かつて明治三十三、四年頃、暫く籍を置いたことのある新聞社であるから、嚴密に言へば再入社なのである。この明治三十三、四年頃は、泣菫が大阪心齋橋の金尾文淵堂に寄寓して、雑誌『小天地』を編輯してゐた時期であるから、どんな条件の下に、どんな任務に服してゐたのか、はつきり突きとめたいと思つて、知人浦

上五六氏が毎日新聞大阪本社に在勤中、依頼して調査して頂いたのであるが、どうしても古い時代の記録は見出されなかつたさうである。（以下度々引用する大正以後の社歴は、同氏から頂いた資料に拠るものである。）

先年、泣菫が始めて帝国新聞社に入社し、新聞界の人として再出発しようとした時、島村抱月は詩人泣菫を愛する旧友の一人として、新聞界の空氣がその詩魂を害ふことを憂ひ、書を寄せて反対の意向を洩したのであったが、やがてその抱月自身が、早稲田大学教授の地位を捨てて、愛人松井須磨子と芸術座を組織し、新劇運動の陣頭に立つに至つたのは、誠に皮肉な運命であつた。

同年十月、ストリンドベルと作「罪人」の翻訳が『三田文学』に、翌二年一月、同じ作家の「老爺」の翻訳が『早稲田文学』に掲載せられてゐるのは、泣菫には珍らしい訳業であり、またストリ

ンドベルヒ受容史上の一資料でもあるから、特に記録して置く。

泣菫は文壇登場の当初から早稲田出身の文人たちと親しい間柄であったから、島村抱月の帰朝を迎へて再興せられた『早稲田文学』から度々寄稿を求められたのは当然であるが、『三田文学』にも、その創刊（明治四十三年）以来幾度か執筆してゐるのは、同誌の主宰者たる永井荷風が、泣菫の隠れた知己であつたからであらう。荷風が泣菫を知つたのは、双方に好意をもつてゐた上田敏の仲介によるものと考へられさうであるが、さうではない。荷風がまだ外遊以前、若くて巖谷小波の木曜会のメンバーであつた頃、小波門下の赤木巴山（備中出身、早稲田大学卒）から泣菫について聞くとこゝろがあり、『暮笛集』の作者とその作品とに親近感を抱いてゐたものらしく思はれるのである。

新聞人としての泣菫は、明治天皇の御陵、伏見桃山に於ける御儀式の記事担当者として、燕尾服着用で出向いて行つたのが、この編輯局見習時代のこと、その時の記事は名文だといふ評判を得た。そして同年十二月一日付で「社員に登用」という発令があつたのである。

大正三年（一九一四）七月、第一次世界大戦が勃発して、日本人もはや歐洲に於ける戦局の推移に無関心ではゐられなくなつ

た。新聞人としての泣菫の身辺も次第に忙しさを加へて来たが、九月八日、突如として郷里^{つちじま}連島から、父篤太郎急逝の飛電が届いたのである。篤太郎はかねて世話役として尽力してゐた地藏院に赴いて、甚を囲んでゐる最中に俄に脳溢血で倒れたのであつたら、泣菫をはじめ子女も親戚の人々も皆、空しい遺骸に對面したばかりであつた。享年七十八歳。

葬儀は薄田家の東隣の潮音寺で営まれた。家の宗旨は臨済宗であるから、篤太郎には生前既に温山宗篤居士という居士号が、備中の名刹、井山の宝福寺の住職で、後に東福寺の管長に就任した九峰老師から与へられてゐた。今日ではお布施次第で与へられる院号付きの仰々しい戒名があまりに一般化した為に、この居士号も大層簡略な戒名だと誤解する向もありかねないので、念の為に説明する。近世に於いては庶民の戒名には、男ならば信士、女ならば信女が付くのが慣習で、村でも「代々居士、代々大姉の家柄」といふのは歴とした旧家に限られてゐたのである。

この年泣菫は数へ年三十八歳、家督を相続して薄田本家第十二代の主となり、その家長としての責任は一層重くなつて来た。

これに先立って同年八月、春陽堂から『象牙の塔』が刊行せられた。今日の各種新書版に似たやうな性格の企画である『現代文芸叢書』の一冊として出た三五版の小冊子で、「明治四十四年よ

り大正三年へかけて随時執筆した」文章を収録したものである。

これらの文章の中で注目すべきは、「内部両性の葛藤」「女性の芸術」「中性」「処女生殖」など、男女両性の性と性格の問題を考察している諸篇である。

泣堇は結婚生活に入って始めて女性を知り、「男と女——この二つの性の間には、互ひに了解することの出来ない性と性格との秘密がある。」（「女性の芸術」）ことを痛感し、オットー・ワインデルの『性と性格』などを讀んだり、一身に男女両性を具へたやうな奇異な精神生活を体験した英詩人ウィリアム・シャープの「内部両性の葛藤」について語ったりしてゐるが、この問題は当時の泣堇にとって余程重大な関心事であつたと見えて「晶子さんが帰つて来た」「摂津大塚の芸術」などの中でも、この問題に触れてゐる。

大正四年（一九一五）二月一日、次女和子誕生、これで泣堇の愛児は一男二女となつた。同年十二月二十三日付をもって「学芸部副部長を命ず」といふ発令があつたが、当時の学芸部長は先輩菊池幽芳その人であつたので、競争紙朝日新聞に対抗して学芸欄をいかに充実させるかといふ新しい課題は、殆ど泣堇の才腕に一任せられたやうなものである。

二

大正五年（一九一六）の春以来、大阪毎日の夕刊に泣堇の茶話^{ばなし}が載るやうになつた。その年の秋に出た最初の単行本『茶話』のはしがきに於いて、作者はその述作の態度を語って「その名の通り、お茶を飲みながら世間話をするやうな気持で、また画家がカリカチュールを描くやうな気持で」書き始めたものだと言つてゐるが、毎日一篇づつ紙上に現れるこの「茶話」は、耳新しい、おもしろい話題を提供してくれる楽しい読物として、広汎な読者層の歓迎を受け、毎晩夕刊の配達せられるのを待ち受けて、真先にこの欄に目を注ぐといふ熱心な愛読者が多くなつたので、その要望に答へて、遂に連載数年に及ぶ結果を生んだのである。

泣堇は博大な教養人であるから「茶話」の話題は極めて豊富である。古典的知識に基づく題材の他に、新聞人として読破した当時の外国新聞や雑誌から得た材料によつたものと思はれる、第一次世界大戦下の「時の人」であるアメリカ大統領や、ドイツ皇帝などが登場してくるし、当時の日本の政府当局者や知名の財界人、大学教授などの噂話も幾度か話題に上つてゐる。それらの人々が

悉く歴史的人物の仲間に入ってしまった今日もなほ、『茶話』がおもしろく読まれるのは、言ふまでもなく著者の話術の巧妙な爲である。警拔な譬喩は至るところに散在してゐるが、人の意表に出る奇警な譬喩を駆使することにかけては、泣堇の技倆は夏目漱石と兄たりがたく、弟たりがたいものであらう。輕妙なユーモア、それは著者本来の性情が、英文学の教養によって洗練せられたものと思はれる。更に屢、人を驚かす痛烈な諷刺、辛辣な皮肉も、少しも人を傷つけるやうな性質のものではないことが、注目すべき『茶話』の持味である。これは泣堇のヒューマニストとしての人間觀がその根柢にあって、終始一貫してゐるからに相違ない。旧友高安月郊は、後年泣堇全集刊行に際して、次のやうに述べてゐる。

隨筆は新聞社に入ってからで、それに危険もあつたが、君は雅俗共通の手法を解して、古今東西の人事を捉へ、時に諷刺を閃かしたのは、まづ意外に思つた事もある。私は京都時代を共にしたが、彼方此方と同行しても、皮肉じみた言を聞いたことはなかった。これは現実の経験が段々觀察を鋭くしたのであらう。然も君の諷刺は露骨でない。浪漫的夢は破れても人世を罵倒するほど激しくもない。(「泣堇氏の詩集」^{註1}下)

泣堇は壇上に立つて講演をすることは苦手としたが、座談はその好むところであつて、話題が豊富な上に、ユーモラスな話術をもつて人を笑はせる名人であつたとは、彼と親しく交つた人々の口を揃へて語るところである。当時大阪の土佐堀に住んで弁護士を開業してゐた旧友中井隼太などは、職業柄不愉快なことが重なり、泣堇を訪問して、辛辣な人間觀察談を聞くのが何よりの治療だと喜んでゐた。その皮肉は矢継ぎ早に浴びせられても、少しも聞く者を不快にしないのが、不思議な魅力であつたといふ。『茶話』はかうした作者の性情から自然に生れて來た産物であることがわかる。

『茶話』は一般讀者から好評を博したばかりでなく、文壇人からも注目せられた。与謝野晶子は二十年前、文学少女時代からその詩に傾倒し、結婚後は夫の寛を通じてその人と親しい間柄となり、今日では夫婦共通の友人として敬愛してゐる泣堇が、詩人としての本質的な仕事、真に自己の内の生活の表現であるやうな作品を世に問はないで、新聞記者としてこの種の夕刊読物などを書くことを、心からその人の爲に惜しんだ。「薄田さんがこんなものをお書きになるとは」と晶子はいたく慨歎したのである。これに反して厨川白村は「これこそ日本文学にかつて見なかつた絶好のエッセイである。英文壇のラムのそれにも比すべきエッセイで

ある。」と激賞してゐるが、同じく英文学者である戸川秋骨は、後年全集の第一回配本としてその第三巻（「茶話」上）が出た時の書評に於いて

但し随筆集とある通り、それは正しく随筆ではあらうが、今日伝へられてゐるやうなエッセイズではない。この全集第三巻をエッセイ集と思ふものがあつたならそれは間違である。……随筆といふ文字から或は誤解を招きはしまいかと懸念された。

……今ここにエッセイの講釈をするのは、甚だその処を得ない事であるからそれは出来ないが、エッセイには、その筆者の個性或は性格がにじみ出てゐなければならぬ、といふのが第一の条件となつてゐる。今この一篇をなす面白い小話は、そのいづれを見ても泣菫氏の個性の出でゐるのは一つもない。

併し若し沢山のそれ等の内に、自から氏の個性が潜んでゐるとか或はあらはれてゐるかといふのならば、さうもいへるかも知れないが、さう考へると著者の個性といふものが、甚だつまらないものになつて来る。私は……この一篇を以て、今日の所謂エッセイといふ意の随筆でなくて、著者のいふ通りの茶話集として見たかと思ふ。

と反対意見を述べてゐる。そして、そのつもりで見れば「面白味も趣味も出ようといふもの」であり、

すべて軽快で、面白く読まれるが、その門戸の広きにも驚かされる。その識、古今東西に亘るといふのは実にこの事であらう。而もそのいづれの篇も、気軽に横臥して読むにも適するのみならず、年長者にも、少年にも、男にも女にも興味の豊かな話のみで、所謂その門戸の広さと共に万人に向くものである。^{註2}

と評価してゐる。『茶話』が書かれ始めてから二十余年、『茶話全集』（大阪毎日新聞社版）が刊行せられた時から数へても既に十四年を隔てて書かれたこの秋骨の意見こそ、公正にして妥当な『茶話』評と見るべきであらう。

『茶話』の成功によつて、泣菫は随筆家として再発足することになり、やがて秋骨の註文通り、作者の個性或は性格のにじみ出てゐるやうな立派な随筆を世に問ふに至つたのであるから、晶子の慨歎にも拘らず、『茶話』を書いたことは、泣菫の作家的生涯に於いて、第二の出発点となつたのであつて、決して精力の浪費でも、無駄な仕事でもなかつたのである。

大正五年十月、洛陽堂から刊行せられた菊半截、本文二百四十六頁の小冊子『茶話』、これが『茶話』の最初の単行本であつて、収録するところ七十九篇、その後、^{註3}玄文社から『後の茶話』（大正七年四月）『新茶話』（大正八年六月）が出、大正十三年

に至って、大阪毎日新聞社から、その集大成本として『茶話全集』上下二巻が刊行せられたのである。これらの単行本は、文字通り洛陽の紙価を高からしめたもので、爾来『茶話』といふ名称は、泣菫その人と切っても切れない結び付きをもって、広く世間に通用するやうになったが、最初は極く軽い気持で命名されたもののやうに思はれる。既に十五年も以前のことであるが、当時読売新聞に連日掲載せられた『茶話』のうち、おもしろいもの八十余篇を選んだといふ、読売新聞社編『茶話』の一卷が、明治三十四年に文友館から発行せられてゐるのである。この事実を泣菫が全く知らなかったとは考へられないし、その絶倫の記憶力は、人も許し、自らも許す程の泣菫が、そのことを完全に忘却していたとは、尚更考へられないからである。

『茶話全集』上下二巻に収められた文章は、約五百篇といふ大した量である。この書物が絶版になった後も、なほ需要があるといふので、昭和三年十月、この中から百五十篇を抄出した『茶話抄』を創元社から刊行したが、同年八月に至って普及版『茶話全集』が同社から刊行せられた。この普及版は、以前の集大成本に更に増補を加へたもので、菊半截版、上下二巻、各五百頁、定価各冊七十五銭の廉価本であったから、非常によく売れた。終戦後、新しく創元文庫版として出た『茶話』（昭和二十六年十一月）

は、その中から七十四章を採録した抄本であるが、解説者河盛好蔵氏も言はれる通り、戦後の新聞界に於けるコラムもの流行の折柄、その遠い先駆者であり、しかも文品の高い泣菫の『茶話』がかうして再び顧みられるのは意味深いことと思はれた。

三

大正五年という年は、かくて泣菫にとっては隨筆家として再発足した記念すべき年となったが、同年三月には角田浩々歌客が他界し、七月には上田敏が急逝したので、泣菫は二人の知友を失ったのである。

角田浩々歌客は、かつて故平尾不孤と三人で、雑誌『小天地』の編輯陣を構成してゐた頃からの古い友人であり、後には毎日新聞社に於いても同僚となった間柄である。この十七年来の交友である角田は、泣菫よりも八歳の年長で、今年四十八歳になつてゐた。先年東京日日新聞（現在の毎日新聞東京本社）の学芸部長に榮転して大阪を去つたのであるが、彼は自分の東京への進出を心から喜んでゐた。去る一月に来阪した際にも、会って話したばかりであつたのに、その計報は突如、新聞社からの電話によって、菊池幽芳と同道して文楽座に人形浄瑠璃を鑑賞中であつた泣菫の耳に達したのであつた。角田の死を悼む情は深いものがあつたの

で、それは真情の籠った長い文章となって紙上に現れた。

上田敏は、昨年四月、最愛のたったひとりの令嬢のために、家族を東京に移し、單身京都に残留した頃から、著しく健康を害してゐたが、今年七月上京して久しぶりに家族と談笑した後、俄に病を発して急逝したのである。四十三歳といふまだ春秋に富む齡を以て世を早うしたこの学匠詩人に対し、先年来の交誼を想ふ時、泣菫の哀悼の念は無論深いものがあつたに相違ない。その急逝の報に接した時の感想を、後日「こんな痛ましい死様はない、全く運命の暗討だと思つた^(註4)」と述べてゐる。

なほ同年十二月には夏目漱石が逝去してゐる。競争紙朝日新聞社の人であつた漱石に対してであるから、仰々しい記事を載せることは憚られたらしいが、文壇の大家の死として哀惜せられてゐるのは勿論である。泣菫個人としては、漱石とは遂に面会する機会を得なかつたが、その隨筆には度々登場させてゐる程で、もとより敬意を払つてゐた作家であるから、早速追悼の一文を綴つたが、この文章は単行本には収録せられてゐない。

今年泣菫は数へ年四十歳、所謂不惑の齡に達して、いよいよ社内でも重んぜられ、縦横に活躍するやうになつて来たのであるが、不幸な病の前駆症状はこの頃から始まつたものの如くである。手が少し不自由になつて来たのであるが、医師は書瘥^{しよけい}という病名を

下し、種々手当も施したものの、まだその頃は泣菫自身も重大な事態とは考へず、連日の激務に追はれてゐたのであつた。

大正六年（一九一七）十二月、富山房から『子守唄』が刊行せられた。前章に述べた通り泣菫の子守唄は明治三十九年頃から試作せられた、日本童謡史上の暁の星であるが、金尾文淵堂の経済的破綻によつて、出版不能となつて後、暫く作者の手許に保留せられてゐた。阪神電車が郊外生活の快適を宣伝し、乗客数の増加を計らうといふ経営上の方針に基いて雑誌『郊外生活』を発行するに及んで、名越国三郎の挿画を入れて、同誌に連載するやうになつたのは、編輯者深江彦一^(註5)が帝国新聞社時代の部下であり、引き続きその後よく面倒を見てゐた後輩だつた縁故によるものであるが、それらの作品を短い童話と共に一冊に纏めてここに単行本として刊行したものである。

島崎藤村がフランスの旅から帰つたのは前年であつたが、芝西久保桜川町の風柳館といふ下宿屋へ、母なき四人の子たちを連れて移り住んだのは今年であるといふ。翌七年には麻布飯倉片町に一戸を構へてゐるので、泣菫が風柳館へ始めて藤村を訪問したのが、その記憶の通り「ある年の一月松の内のこと」（「初対面か

二度目か」) だったとすれば、それは七年一月のこととなる。

泣菫は藤村とは古くから文通はあったが、対面したのは今度が始めてであった。それなのに藤村は、座に通された泣菫に向って「や、しばらく振りでしたね。この前お目にかかってから幾年になりませう。」

と言ったさうである。初対面の先輩から、こんな不思議な挨拶をされた泣菫の驚きは察するに足る。後に『泣菫詩集』の「詩集の後に」と、「初対面か二度目か」といふ随筆(『樹下石上』所収)とに、繰返しこの事件を語ってゐるのも無理はないと思ふ。

この一場の出来事は、言ふまでもなく藤村の方が誤解してゐた訳であるが、彼は容易に自分の主張を曲げようとはしなかった。この謎を解く鍵は、「国木田君がゐたころ、どこかで一緒にお目にかかったことがある」と言つた藤村の言葉の中に潜んでゐるやうに思はれる。泣菫が独歩に会つたのは、明治三十六年、大阪に於いてであつたのだが、独歩の原稿を好意的に引受けてくれる雑誌『小天地』と、その編輯者としての泣菫の名は、独歩の口から幾度か感激的に語られたものであらう。そして、それを聞かされた藤村の記憶の中には、詩の道に於ける後進としての泣菫の名が、独歩と結び付いて刻み付けられ、いつしか面識あるものと確信せられるに至つたものであらう。

泣菫が詩人としての出発当初に於いて、藤村を学ぶ者といふ批評を受けたこと、実際に藤村の詩を愛誦してゐたことなどについては、既に述べて置いたが、明治三十六年の夏、大阪で面会した徳富蘆花から「詩壇の先進S君の詩を何と見る？」と問はれた時には、「落梅集の詩人は、抱負を裏切る似而非謙遜が^{きざ}氣障」と答へたと、蘆花の自伝小説『富士』の第三卷(第十一章「花の夕貌」の章)には書かれてゐる。若い泣菫が、まだ見ぬ藤村の性格を、その作品を通じて感得し、これに鋭い批判を加へてゐたことがわかる。しかし、自分も人間として成長した今日始めて接した藤村は、四十七歳にして既にその頭髮は半白となつてをり、その半生の労作と悲哀とを物語るやうに見え、これが往年の『若菜集』の詩人かと疑はれる程であつたから、泣菫は充分の同情と尊敬とをもつてこれに對したやうである。

新聞社の公の用談がほぼ片付いた頃、男の子二人が外から歸つて来た。藤村は本箱の抽斗から密柑を二つ取出して、一つづつ与へながら、

「さ、これをあげますから、そこでおとなしく遊んでゐるんですよ。今お客様ですからね。」
と言つた。

「なかなかおたいいではありませんね。」

と思はず泣菫がさう言ふと、藤村は

「いや、あれで男の子はまだ始末がいい方なんですよ。困られるのは娘の子で、髪の話まで焼かされるんですからね。お蔭でこのごろは女髪結の真似までさせられてます。」

と答へて苦笑した。泣菫は暗然としてしまつて、どうしても笑へなかつた。

四

大正七年（一九一八）三月、芥川竜之介が大阪毎日新聞の社友となつた。泣菫は当時文壇の第一線に活躍してゐた白樺派の作家達にも無論寄稿を依頼してゐたのであるが、彼がいちはやく注目し、最もその将来に期待をかけてゐたのは、新進鋭の芥川だったのである。芥川は大正五年二月、第四次『新思潮』の創刊号に載せた「鼻」で認められ、「芋粥」（九月、『新小説』）、「手巾」（十月、『中央公論』）と立てつづけに力作を発表して、忽ち新進作家としての地位を確立したものであったから、その華やかな登場ぶりは無論文壇人の注目の的であつたが、芥川作品にあらはれてゐる、若い作家には珍らしい書卷の氣の横溢、即ちその教養の深さと、俊爽の氣のひらめきと、文品の高さを考へ合せるといかにも泣菫の好みにぴたりと合致しそうな条件が揃つてゐる

のは、何人も肯くところであらう。

芥川が泣菫の需めに応じて大阪毎日のために執筆した第一作は「戯作三昧」（大正六年十月—十一月）であつたが、この作品は芥川の試みた最初の新聞連載小説であつた。このお目見え作品の成功によつて、新聞社側では芥川を専属作家として確保すべく、社友としての契約を取り結びたいといふ意向が強くなつたものであらう。翌七年一月、泣菫はわざわざ上京して芥川と面会し、この問題について交渉してみたところ、丁度二月には結婚式を挙げる予定であつた芥川としては、この際、横須賀の海軍機関学校嘱託教官としての俸給の他に、毎月一定の収入が加はることは誠に心強い話であるから、喜んでその相談に乗つたのである。

社友としての条件は、他の新聞には一切執筆しない、雑誌に小説を発表することは自由として、月手当五十円、小説の原稿料は従前通りといふことであつた。かくて大阪毎日の学芸部副部長としての泣菫は、この前途多望の新進作家を獲得して大いに氣をよくし、これを機会に学芸欄をより一層充実させようと、新しい構想を練るのであつた。

この頃、世界的に猛威をふるつた悪性の流行性感冒は、同年の秋に至つて遂にわが国にも侵入して來た。当時の人々はこれをス

ペインかぜと呼んだが、老人たちは、お染かぜと呼ばれた江戸時代のまじなひをそのまま実行して、家の門口に「久松留守」と書いて帖ったりした。

島村抱月がこの流行性感冒の犠牲となって、四十八歳で亡くなったのは十一月五日のことであった。泣菫は詩壇の第一線に活躍してゐた時代にも、終始関西の地に定住してゐたし、自分のうから友を求めるやうな性格ではなかったから、その交友範囲は狭かったが、その限られた友人のうちでも、抱月は最も縁の深い一人である。批評家としての抱月は泣菫の詩壇への登場のはじめから、終始愛らぬ好意を寄せてくれた人であるが、それよりも抱月の人となりそのものが、泣菫にとっては最も好ましい類型に属してゐたのである。抱月は聡明で、心が暖くて、しかもいつも静かで寂しい人であった。その上に、上田敏のやうに生れながらの都会人ではなく、田舎の食しい家庭に生れ、年少にして他人の飯の味も知つてゐる苦勞人である。泣菫が心をひらいて交ることの出来る条件は具つてゐる。泣菫は往年自然主義運動の理論上の立役者であつた評論家としての抱月を高く評価してをり、「芸術的作品にも、人生の事実にも、その真相を突きとめなければ止まないその透徹な分析力と綜合力とは、当時の文壇にずばぬけて光つてゐた。」といひ、鑑賞力では上田敏のほうが一段とすぐれて

ゐたが、批評眼は抱月のはうがずっと鋭かったと批判してゐる。

聰明な抱月が、自己の天分は學者であり、批評家であるに適してゐることを知りながら、敢へて早稲田の講壇を去り、家庭を破壊して松井須磨子と生活を共にし、芸術座を率ゐて新劇運動の苦難の道に一步を踏み出した時も、泣菫はその性格と家庭事情とを深く洞察して、世間一般から手きびしい常識的非難を浴びてゐる抱月に対して同情を惜しまなかった。その後芸術座が関西へ巡業して来るやうになると、今度は泣菫が旧友のために応援の手をさし伸べる番であつた。新聞人としての泣菫が、興行上、有力な後援者の役割を果したことは言ふまでもないが、更に開演に先立つて催される講演会には、必ず引張り出されて演壇に立つたのであつた。抱月の交友関係の範囲も亦広くはなかつたので、かうした場合にも講演者の人選には困るらしい事情を察して、苦手とする講演をもいつも快く引き受けてゐたのである。

その愛すべき友抱月が、先年の上田敏の場合と同様、「卑怯な運命の不意討」に倒れたのである。泣菫は心からその死を哀悼し、残された須磨子が故人の全精神を傾倒した遺業を継承し、更に発展させることを期待したのであつたが、その須磨子は抱月の死後俄に四面楚歌の状態に陥り、遂に生き抜く力を失つて、年が改まると間もなく自殺を遂げてしまった。泣菫は以前から野性的な

情熱と闘志の持主ではあるが、感情生活が単純で、教養の浅い須磨子に対して、あきたりぬ感情を抱いてゐたらしい。抱月に対する親愛感が深いために、その愛人に対して望蜀の念を抱いたのは無理からぬことである。それでも泣菫は、須磨子もいやしくも芸術家であるからには、芸術家としての修養の結果、師たり愛人たる抱月との死別といふ運命の試練に対しても、よく堪へうる程の心境には到達してゐるものと想像してゐた。しかし須磨子の心境は泣菫の考へたやうな高さはまだ程遠かつたのである。兩人の死に直面して書かれた「島村抱月氏を悼む」^{註(五)}「松井須磨子の恋と芸術」の二篇は、泣菫の抱月に対する深い愛情と理解の籠つた文章であるから、抱月を論ずる者にとつて必読の文字であるが、又一面泣菫の芸術観や人生観を窺ふためにも、見逃すことの出来ない文献であると思ふ。

五

大正七年の暮、歐洲大陸の戦塵も漸くおさまつて、講和使節として西園寺公望・牧野伸顯が渡欧することに決定したが、明けて大正八年(一九一九)一月、徳富蘆花も亦、平和の訪れた歐洲の地を目指して、二度目の外遊の旅に、今回は夫人同伴で出発しようとしてゐた。泣菫はその出発前に一度会ひたくなって、文淵堂主人

金尾種次郎と同道、粕谷の恒春園を訪れたが、それは一月十七日の午後であつた。蘆花と金尾との間には、今回の旅行記(のちに『日本から日本へ』と題して文淵堂から出た)の出版契約が成立してゐて、その前渡し金が旅費の一部に見込まれてゐたのである。去る明治三十九年(一九〇六)四月、蘆花が聖地巡礼を志して日本を後にした時は、金尾はその紀行文の出版許可を得たいばかりに、わざわざ神戸から門司まで同船して行き、その帰途蘆花から托された手紙を持って、連島に泣菫を訪ねたのであつたから、三人の対談のうちには、定めてその昔話も出たことであらう。

その頃、泣菫は今度は芥川のはうから、従来の関係を更に一歩進めて、社員として待遇してほしいといふ相談を受けてゐた。芥川は先師夏目漱石の朝日新聞社に於ける待遇と同じやうに「出勤する義務だけは負はずに年に何回かの小説を何度か書く事を条件として報酬を貰ふ」(大正八年一月十二日付書簡)ことを考へ出したのである。芥川は更に親友菊池寛のためにも泣菫に依頼するところがあつたのであるが、これらの相談は泣菫によって好意的に取次がれたと見え、大正八年三月をもって芥川は氣の重かつた海軍の教職を辞して大阪毎日新聞社員となり、同時に菊池は東京日日新聞のはうに籍を置くことに決定した。出勤の義務は負は

ず、年何回かの小説執筆を条件として、原稿料なしで月俸百三十円といふ契約であった。

菊池寛の入社後最初の作品は小説「藤十郎の恋」で、四月に、東京日日、大阪毎日両紙に掲載せられたが、関西側の評判もよく、十月には大森痴雪の脚色した台本が中村雁治郎によって上演せられて、この芝居も亦大当りを取ったのである。（菊池自身が戯曲として発表したのは、更にその後のことに属する。）

翌大正九年十月には菊池の通俗長篇小説の第一作である「真珠夫人」が東西両紙に連載せられることになった。長年菊池幽芳の小説になじんでゐた大阪毎日の読者たちも、新聞小説に新生面を開拓したこの作品の新鮮な魅力には忽ち魂を奪はれて、熱狂的な歓迎ぶりを示した。「真珠夫人」の成功に氣をよくして、爾来しきりに通俗長篇小説を書くやうになった菊池は、大衆相手の新聞社にとって、芥川よりも遥に利用価値の大きな、貴重な存在となつたのであるが、泣菫個人としては、最後まで人間としての菊池には好感が持てなかつたらしいのである。菊池の態度の粗野であつた点や、一度名を成すと作品の調子を下げて濫作も辞せず、やがて文壇のボス的存在となつて勢威を張つたその低俗性などが、氣に入らなかつたのは尤もであると思はれる。もとより事務的な交渉に終始して、人間的な接触を深めなかつた為に、その長所を

認めるに至らなかつた事情も、考慮に入れるべきであらうが、同様に主として事務的な交渉を続けながらも芥川に対しては、それを超えて人間的な親愛感を持つことが出来たのである。芥川の精神的貴族主義者と呼ばれた都雅な風格、都会人らしい細心な律儀さ、礼儀正しい態度、特に泣菫の引退後も変らぬ好意を示した情誼などが、人間芥川に対する泣菫の評価を高めたものと考えてよからうと思ふ。

芥川の泣菫に宛てた書簡は、全集所載の分のみを見ても、その内容は殆ど事務的な用件に限られてゐる。それは両人の關係から見て極めて当然の現象であるが、ここにただ一通の例外がある。大正八年十月二十七日付の書簡がそれで、「薄田さん 今日大阪毎日の学芸部長へ書くのではありません。あなたへ書くのです。」といふ冒頭の一句の示す通り、泣菫個人に宛てて、その過去に於ける詩業に対する讃仰の情を披瀝したものである。即ち、来泊した詩人富田碎花と二人で泣菫論を展開したことを報じ、続いてまだ府立一中の生徒だった頃の秦豊吉が『文章世界』に投稿した文の中に、「葛城の神」の読後感を記した個所があつて、大いに共鳴したといふ中学時代の回想や、漱石門下の一人、赤木柎平（池崎忠孝）が「公孫樹下にたちて」の長篇を暗誦してゐるのに驚いた経験を語り、更に去る六月、京都に遊んだ時、友人と会食中に

ふと「一花心興がりて」と「雷神の歌」の一句が話題に上ったこと、最近「ああ大和にしあらましかば」を読んで大いに感心したことなどを書き連ねた末、「富田のやうなホイットマンやトラウベルの好きな人でさへその感心に同意すると云ふ事は私にとっていい教訓でした。それは完成した芸術品は何時までも生きると云ふ事です。……それが自分と近い時代に実例としてあると云ふ事は非常に心丈夫です。」と結ばれてゐる長文の書簡である。かういふ手紙を貰って喜ばない人がゐたら、それはよくよくのつむじ曲りといふものであらう。

泣菫は大正八年二月六日付をもって「論説課勤務」の辞令を受け、同月二十八日には「学芸部長心得」を命ぜられたが、更に六月十四日付をもって「学芸部長を命ず」といふ発令があったもので、社の長老であつた菊池幽芳引退の後を受けて、いよいよ縦横にその才腕を揮ふことの出来る時節が到来したのである。この年、泣菫は数へ年四十三歳になつてゐた。

六

大正十年（一九二一）四月には与謝野晶子が西村伊作の創設した文化学院の学監に就任してゐるが、晶子が教育界に乗り出したといふニュースに耳を傾けるよりも、同じ頃身近に起つた出来事

のために泣菫の心は打ち砕かれてゐた。親友中井隼太が亡くなつたのである。中井は岡山中学以来の親友で、結婚の時には媒酌人になつてもらひ、帝国新聞社に就任する為、単身上阪した際も暫くは同家に置いてもらつた上、いよいよ西宮川尻の家が空いて家族が出て来る時には、予め中井母堂が女中を連れて泊り込み、すっかり家の中を整備して迎へてくれた程、家族的にも親戚以上の親交を続けてゐた同柄である。中井は晩年には大阪市會議員に出たりして、その生活は繁忙を極めてゐたが、泣菫と會つて話すのを何よりも楽しみにしてゐた。泣菫のはうでも、大阪毎日の学芸部長として大正文壇の新人たちとの交渉が多くなつても、もはやこれら文壇人と人間的な交りを持つことはなく、ただ一人芥川に対して人間的好感を抱くに至つたといふ程度であつたから、いつまでも懐しく尊いものは少年の日以来の友情に結ばれた人々であつた。その数少い友人の中でも特に信頼してゐた益友中井を失つたことは泣菫にとって非常に大きな打撃であつた。

その中井の死に先立つて、同年三月には芥川が大阪毎日新聞の海外視察員として中国へ出発してゐる。この企画は泣菫の発案で、新時代の作家としては珍しく漢詩文の素養の深い芥川であるから、中国にこれを派遣したならば、その豊富な実地見聞が作家

としての彼の将来に大きなプラスとなるであらうといふ含みもあり、当面の収穫としては、その旅行記が特種記事となることを期待したものであったが、折角の泣菫の配慮にも拘らず、蒲柳の質である芥川にとって、全然風土の異った大陸への大旅行は無理であった。上海に到着するなり肋膜炎に罹った芥川は、暫くの静養の後、春から夏へかけて江南から長江を遡り、更に北上して北京、大同に遊ぶといふ大陸周遊の旅を続けたが、それが快適な旅行でなかったことは、後に書かれた『支那遊記』の諸篇によっても窺ふことが出来よう。

この頃から泣菫の身体的変調は漸くその度を加へ、誰の目にも痛々しく映るやうになった。話をしようとすれば吃り気味になり、文字を書かうとすれば手が震へるので、本人の苦痛は勿論一通りではなかった。泣菫は元来交る程の人から愛される人からであつた上、よく部下の面倒を見るので、社内では同僚にも後輩にも好意を持たれてゐた。昼食の時、弁当の割箸を割るのも難儀らしい泣菫の様子を見かねて、毎日必ずその隣に席を取って、彼のために箸を割ってくれる人もあつたといふことであるが、まだ四十五・六歳といふ働き盛りの年齢であるのに、かうして次第に不自由の度を加へてゆく自分の手足を、泣菫はどんな気持で見守

つてゐたことであらうか。京阪神に数多い知名の医師たちも、これに對して効果をあらはすやうな治療法を見出すことは出来なかつたのである。

やがて社内の階段の昇降にも不自由を感じるに至つた泣菫は、人の見る目も恥しいと言って、引退の意志を明らかにしたのであるが、社長本山彦一は容易にその辞意を認めようとはしなかつた。毎日出社するには及ばない、週に一回の出社でも差支ない、それも自分の乗用車に送り迎へをさせよう、出社中は無論自由にその車を使つてもらつてよいとまで言つたといふのは、勿論名学芸部長と言はれた泣菫の社に對する功績を認め、その才腕を惜しんだ為でもあらうが、人間としての泣菫に好意を持つてゐなかつたならば、かうまでは言はなかつたであらう。資本主義的機構の既に整つた大正時代の大新聞社に於いて、かほどの配慮が払はれるといふのは、無論破格の待遇に相違ない。どこかに古武士のやうな風格を持ち合せてゐる泣菫であるから、大いにその知遇には感激したかと思はれるが、飽くまでその初志を曲げようとはしなかつた。かくて大正十二年（一九二三）をもつて、泣菫の新聞人としての生活には終止符が打たれたのである。同年十二月二十六日付をもつて「待命休職を命ず」といふ発令のあつたのが、事実上泣菫の引退した時期を示すものと考へられる。一年半の後、大

正十四年五月十六日付をもって「復職、出版部長を命ず」といふ発令を見るのは、能ふ限り社員としての待遇を続けるための恩命であったと見え、続いて六月一日付をもって更に「待命休職を命ず」と発令せられてゐるのである。

かくして昭和三年（一九二四）に至って、五月二十一日付をもって漸く「休職満期に付き解雇」といふ辞令が出たが、その後も学芸部嘱託といふ資格で、生涯大阪毎日新聞との関係は繋がってゐたのである。

七

新聞人としての激務から解放せられた泣菫は、これを機会に自分の半生の業績を纏めてみようと思ひ立った。そこでまづ『茶話全集』が編まれて、上巻は大正十三年（一九二四）二月、下巻は同年六月に大阪毎日新聞社から刊行せられた。いづれも四六版、四百六十頁前後の書冊である。

続いて準備に着手したのは『泣菫詩集』の編纂であつた。泣菫・有明と常に並び称せられる一方の雄、蒲原有明の『有明詩集』は既に去る大正十一年六月、アルスから刊行せられてゐるが、泣菫の詩業はまだ一冊に取り纏められてゐないので、先年三木露風

なども「私は貴下の御作品があのまゝになつてゐることを残念に存じます^(註7)。」と書を寄せたことがあり、既刊の詩集はすべて絶版になつて年久しいので、尚更その詩業の集大成を待望する声は、各方面から泣菫の耳に達してゐたのである。

『泣菫詩集』は四六版八百八十二頁の大冊となつて大正十四年（一九二五）二月、同じく大阪毎日新聞社から刊行せられた。装幀及び中扉（収録詩集ごとに挿入）を飾るカットの絵は名越国三郎の手に成り、用紙にコットン紙を採用してゐるので、大冊ながら割合に軽く出来上つてゐる。五月には早くも再版が出てゐるが、水色クロス装のが初版本、茶色布装のが再版本である。

この詩集は『有明詩集』の先例に倣つたものか、作品を逆に配列してゐる。既にこれまで単行本に収録せられてゐない『白羊宮』以後の作品から十八篇を選んで「十字街頭」と総題したものを巻頭に置き、「白羊宮」「二十五絃」「白玉姫」（詩篇のみ、文章は除く。）「ゆく春」「暮笛集」の順序に収めて、巻末に「子守唄」を置いてゐるのである。

『泣菫詩集』編纂に當つて、作者は既刊詩集から意に満たない詩篇を削除し、更に全面的に改訂を試みてゐる。削除せられた作品は『暮笛集』から民謡体の詩五篇^(註8)、『ゆく春』から「遣憤」九首全部と「あゝ杜国」の第八、その他に絶句三篇^(註9)、『白玉姫』及

び『白羊宮』からも民謡体の詩が前者から四篇^(註10)、後者から二篇^(註11)。それぞれ除かれてゐるのである。

本文に加へられた改訂の痕は『暮笛集』及び『ゆく春』の初期の作品に於いて著しく、『二十五絃』以後の諸篇には概して少いのである。「公孫樹下にたちて」の「破れ^やの帆脚」が「破れし帆脚」となり、「望郷の歌」の「壬生狂言の歌舞伎子」が「壬生狂言のわざをぎ」と改められたなどが、後期の作品に於ける改訂のうちでは注目すべき箇所であらうが、大いに問題とすべきはむしろ初期の作品に於ける改作の場合であると思ふ。

蒲原有明の『有明詩集』に於ける改作の是非は、当時の詩壇に於いてやかましい問題となった。日夏耿之介・北原白秋両家をはじめ、これを非とする声が高かったにも拘らず、作者有明は頑として自家の見解を固執し、その後も再度三度改訂の試を繰り返したのは、今日ではもはや周知の事実であるが、これに反して『泣菫詩集』の場合は、出版当時もその後も、その改作の事実が一向に問題とせられてゐないのは不思議な話である。そこで『泣菫詩集』に於ける改訂の痕を、少し検討してみようと思ふのであるが、まづ注目せられるのは『暮笛集』巻頭の詩として誰も知る「詩のなやみ」の破題の一句であらう。

遅日^{ちじつ}巷^{ちやうまた}の

塵に行き、

力ある句に

くるしみぬ。

これは頭韻を試みた作例として挙げられる場合などもあって、有名な詩句なのであるが、これが、

遅日巷の

塵に行き、

うつくしき句に

くるしみぬ。

と改められてゐるのには驚く他はない。詩人が苦吟して「詩に瘦せ」るのは、常に「力ある句」を得んがためであって、決して単なる「うつくしき句」を求めてのことではない筈である。筆者はこの一句の改訂を詩人泣菫のために心から遺憾とするものである。

更に同じく『暮笛集』の絶句十九篇のうち、最も改訂の度の甚しい「秋懷」の一篇を取り上げて、原作と比較してみよう。

山、森、烟^{はた}、寺、遠き牧場^{まきば}、

落つる日、ゆく雲、帰る樵夫^{きこり}、

孰^{いづ}れか一種の銚^{さび}を帯びて、

暮天^{ぼてん}の絵様^{えやう}に趣味を見ざる。

今句^{いま}を得んとて路に立てば、

陣觸^{じんぶれ}聞いたる武者の如く

心利^{こころど}騒いで得堪へざるに

田の畔^{くろ}踏みきて草に伏せり。

若し夜の幕^{とばり}の落つる迄も、

歌得で小道に迷ひ居らば、

無才^{むざえ}ぞ。牛飼^{うし}ふ群^{むれ}に入りて、

明日^{あす}より文集^{ぶんしふ}手には取らじ。

野がへり、裂^さけたる笛を吹くも

詩を得ぬ不興に比せば如何に。

これがその原作である。所がその改作はどうなってるかといふと、その前聯八行は暫くこれを措き、後聯六行だけをみても

若し夜の幕^{とばり}の落ちむ迄も、

歌もあらでここに迷ひ居らば、

げに言ふがひなき才^{ざえ}ならめど、

さもあらばあれや、この夕の

えならぬ氣持にひたり得つる

思ひだにあらば、歌はなくも…………。

とすっかり変貌してしまってるのである。

この詩を作った明治三十二年頃の若い泣菫の詩に対する熱情は、誠に原作の表現の通り烈しく突き詰めたものであったので、「この夕のえならぬ氣持にひたり得つる思ひだにあらば、歌はなくも…………。」といふやうな、悠長な、微温的なものではなかった筈である。これも若き^{はたち}二十歳時代の旧作に、五十歳に近い現在の心境をもって手を入れたための改悪であると評する他はない。

かの長篇「葛城の神」の力作は、『白羊宮』刊行の後に世に出た作品であるから、今回始めて単行詩集に収録せられたのは喜ぶべきであるが、その第二章「女神結縛」のうち、第八、九行目が、印刷の際誤って三頁を隔てた後の方、本来の第三十五行目の次にまぎれ込んでしまった。この誤がそのまま、後の全集本にも踏襲せられてゐるのは遺憾に堪へない。第二章の冒頭のところを引用するならば

そのかみ鈍^{にぶ}の北海^{きたうみ}の

鰐^{わに}に愛嬢^{まなご}を奪はれし

父^{ちち}の猪麿^{みまろ}が、おくつきの

毘売^{ひめ}の岬^{みさき}に立ちつくし、

日も夜も呻^{によ}ぶ歎かひに、

わだつみの胸たゆたひて、

潮^{しら}ざる白^{うなざ}む海境を、

の次へ、

百有余^{ももより}の鰐、召人の

伴のひとり^をを遠巻に、

の二行が入って、次の

磯山^{ちか}近に寄りし如^{ごと}、

に続く筈なのである。よい機会であるから、序に指摘して置くことにする。

なほこの詩集に添へられた「詩集の後に」は、泣菫が自己の詩について語った貴重な文献として、泣菫を論ずる人の常に引用するところであるが、これは泣菫が記憶に任せて語ったまゝを速記した文章であって、当時手許に古い雑誌なども揃ってゐなかつたとみえて、その詩壇へのデビューである『新著月刊』第二号所載、「花密蔵難見」についても、「確か明治二十九年か三十年の春」と述べてゐる有様である。そのために、これを拠り所として、泣菫の詩壇への登場を明治二十九年と誤り記す書物が、爾来昭和十年頃までも続々と現れてくるといふ、誠に困った結果が生じたのであった。

『泣菫詩集』に続いて『泣菫全集』が編纂せられ、翌十五年（一九二六）五月、同じく大阪毎日新聞社から刊行せられた。この文集には、前述の『象牙の塔』の内容を収めた他、まだ単行本に収録したことのない文章、短篇小説の旧作、お伽話などを広く集めたもので、『白玉姫』『落葉』『泣菫小品』以後の散文的著作のうち、作者の収録を望まなかったもの以外は、一応ここに取り纏められたと見てよい。

註

- (1) 東京日日新聞、昭和十三年十月十一日（十二日付）夕刊。
- (2) 東京朝日新聞、昭和十四年一月十六日。
- (3) 帝国新聞廃刊後、帰京した結城礼一郎経営の出版社。
- (4) 「島村抱月氏を悼む」の文中に言及。
- (5) 現在日本タイプライターKK社長。
- (6) 『泣菫文集』所収。全集本では「猫の微笑」篇に移さる。
- (7) 大正十年四月十七日付。筆者蔵。
- (8) 「壁にそめたる」「鄙ぶり」「ふなうた」「蜚少女」「娘をかしや」。
- (9) 「桃園」「うたげ」「歓声」。